

## 第1回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和2年11月20日（金）18:00～21:00

（Zoomによるオンライン開催）

■出席者 委員：

いとう ちおり  
伊藤 千織／伊藤千織デザイン事務所 代表

うるし たかひろ  
漆 崇博／一般社団法人A I Sプランニング 代表理事

おおとも えり  
大友 恵理／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員

おざき かなめ  
尾崎 要／アクトコール株式会社 代表取締役

かじた しのぶ  
カジタ シノブ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター

こいえ まさのぶ  
古家 昌伸／北海道新聞社編集局文化部長

こじま たつこ  
小島 達子／株式会社 tatt 代表取締役

さかい しゅうじ  
酒井 秀治／株式会社 SS 計画 代表取締役

さくま もとまさ  
佐久間 泉真／大学生（市民委員）

はちじょう みなこ  
八條 美奈子／札幌フルーツ協会 副会長

みん じんきょん  
関 鎮京／北海道教育大学岩見沢校 准教授

もりしま ひろし  
森嶋 拓／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長

やまもと ゆうき  
山本 雄基／画家

事務局：

札幌市市民文化局長 川上 佳津仁

札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之

札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 信太 希久子

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 木村 謙太

傍聴：10名

■議事概要：

- 1 開会
- 2 札幌市市民文化局長挨拶
- 3 委員自己紹介
- 4 委員長、副委員長の選出

委員長に関鎮京委員、副委員長に酒井秀治委員が選出された。

## 5 議事

### (1) 札幌文化芸術未来会議の目的等

#### ○資料 1-1 から 1-3 を基に事務局から説明

- ・札幌文化芸術未来会議は、札幌市文化芸術基本条例第 10 条に基づき設置された意見交換の仕組み。審議会とは異なり、市に対して答申をいただくものではない。
- ・今回の会議の目的は、新型コロナウイルス感染症の影響も踏まえ、市の短期・中長期的な文化施策の推進に関して意見交換を行うとともに、この会議開催をきっかけとしたネットワークの構築を図ること。
- ・令和 2 年度は広く文化芸術関係者へのアンケート調査を実施し、活動実態・ニーズを把握。令和 3 年度はアンケート結果も踏まえ、必要な事業や施策の展開について意見交換を行う。

### (2) アンケート調査について

#### ○関委員長から、今年 5 月に自身も参加し市民や文化芸術関係者に対して実施したアンケート及び札幌市の文化芸術意識調査等の概要を説明

#### ○文化芸術関係者へのアンケート調査（(仮)文化芸術活動実態調査）の方向性を検討するための意見交換を行うにあたり、関委員長から下記を説明

- ・事前に各委員から提出してもらった「札幌市文化政策の課題」をまとめ、類型化したところ、「連携と横断的な議論の場が少ない」、「文化芸術振興に関する施策・事業が少ない」、「文化芸術に関する多様な情報発信と機会が少ない」の 3 点が大きなポイントとなった。
- ・特に、多くの委員から「連携」というキーワードがあげられ、重要課題となりそうなことが分かった。

#### ○重要課題となりそうな「連携」を中心に、いくつかテーマを設定し、意見交換を行った。

#### 【「文化芸術と他分野の連携による施策（○○のような施策や助成事業等があると良い）」に関する主な意見】

- ・産業分野の民間施設や事業所で抱えている機材や技術等のインフラ情報をシェアし、活用したい芸術家や活動支援団体に提供。それを芸術に活用し、さらに活用したものが産業分野の技術発展に寄与するなどの関係性を作れると面白い。
- ・芸術分野でもフィルムコミッションのような許可申請等の一括化ができる仕組みがあっても良い。
- ・一般に、文化部門と福祉部門が縦割りで情報交換がされていない場合が多く、文化部門で多様な福祉の支援要望が視野に入っていないことが多い。例えば、文化芸術施設で、どのような障害があるかまで視野がいくと、もう少し考えられることが出てくる。

#### 【「文化芸術と他分野との連携があまり行われていない理由・原因」に関する主な意見】

- ・他分野との連携に意義を見出せない。必要と思っていない人が多い。
- ・単純に自己表現ができれば満足という人が多いのではないか。

【「文化芸術と他分野の連携が行われることによって芸術家等にどんなメリットがあるか、どのような変化が生じるか」に関する主な意見】

- ・アーティストと中間支援者として視点が異なるのではないかと。中間支援者には、芸術家の環境や発展のためのサポートという視点があり、他分野との連携により、可能性の広がりや、面白いことが生まれるなどがあるので、芸術家にも連携に興味をもってもらえると良い。
- ・芸術家にメリットがあるというよりも、他分野にこそアートを活用するメリットがある。観光にも、教育にも、仕事にも、コミュニケーションにもアートは何らかの形で寄与できる。

【「現在の助成制度・助成事業の課題」に関する主な意見】

- ・40歳以降の中堅作家の支援の幅が薄い。年齢的に表現のレベルも上がり、中大規模の作品も必要になるケースが多い中、コンペやレジデンス、助成金の年齢制限が40歳以下のケースがかなり多い。活動が続けられなくなる才能ある中堅もいるので、支援が必要。
- ・広く行き渡る助成と、深く集中的に行き渡る助成のメリハリがあると良いのではないかと。
- ・SCARTSをつくる際に、市民の文化芸術活動の窓口になれる仕組み、組織が必要と言う議論があった。新しい制度でなくても、既存の組織を充実させることで対応できることもあるのではないかと。
- ・助成制度に関する周知が行き届いていない。
- ・助成を行う側の理念や、芸術が内包メッセージや社会への役割を理解したうえで支援をする姿勢が必要。
- ・芸術家への経済的（金銭的）な助成だけではなく、仕事の機会を作るということも大切ではないかと。

【アンケートの進め方に関する主な意見】

- ・（アンケート対象とする）札幌市文化芸術の担い手である芸術家等の「担い手」という表現が曖昧で、担い手の定義などがあると良い。  
→市民意識調査は毎年行っているもので、何らかの形で、文化芸術に関わっている方々には、是非アンケートに協力いただきたい。
- ・文化政策は、文化芸術の担い手だけではなく、受け手にある市民の把握も大事。市民意識調査で把握できているなら良いが。  
→一般市民向けの意識調査で2-3項目新たに盛り込むことは可能。
- ・アンケートは大規模に、分野に偏りなく、投げた網が届かない人がいないようにしたいということであれば、これからアンケートをするという情報発信も必要。

○アンケート調査項目案の作成については、下記のとおり進めることとした。

- ・ワーキンググループを作り、アンケート設問の骨格を作成。メンバーは、立候補を募った上で、委員長・副委員長と事務局で調整する。
- ・ワーキンググループの活動は週1回程度とし、議論の結果はメンバー外の委員にも都度情報提供する。